

Document made available under the Patent Cooperation Treaty (PCT)

International application number: PCT/JP05/000726

International filing date: 14 January 2005 (14.01.2005)

Document type: Certified copy of priority document

Document details: Country/Office: JP
Number: 2004-009769
Filing date: 16 January 2004 (16.01.2004)

Date of receipt at the International Bureau: 26 May 2005 (26.05.2005)

Remark: Priority document submitted or transmitted to the International Bureau in compliance with Rule 17.1(a) or (b)



World Intellectual Property Organization (WIPO) - Geneva, Switzerland
Organisation Mondiale de la Propriété Intellectuelle (OMPI) - Genève, Suisse

日本国特許庁
JAPAN PATENT OFFICE

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出願年月日 Date of Application: 2004年 1月16日

出願番号 Application Number: 特願2004-009769

パリ条約による外国への出願に用いる優先権の主張の基礎となる出願の国コードと出願番号

The country code and number of your priority application, to be used for filing abroad under the Paris Convention, is

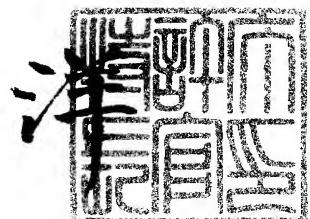
出願人 Applicant(s): 三菱化学株式会社

J P 2004-009769

特許庁長官
Commissioner,
Japan Patent Office

2005年 5月11日

小川



【書類名】 特許願
【整理番号】 J11121
【提出日】 平成16年 1月16日
【あて先】 特許庁長官殿
【国際特許分類】 H01L 33/00
C09K 11/08

【発明者】
【住所又は居所】 神奈川県横浜市青葉区鴨志田町1000番地 株式会社三菱化学
科学技術研究センター内
【氏名】 瀬戸 孝俊

【発明者】
【住所又は居所】 神奈川県横浜市青葉区鴨志田町1000番地 株式会社三菱化学
科学技術研究センター内
【氏名】 木島 直人

【特許出願人】
【識別番号】 000005968
【氏名又は名称】 三菱化学株式会社

【代理人】
【識別番号】 100103997
【弁理士】
【氏名又は名称】 長谷川 曜司

【手数料の表示】
【予納台帳番号】 035035
【納付金額】 21,000円

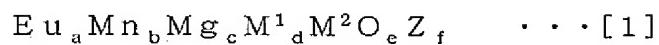
【提出物件の目録】
【物件名】 特許請求の範囲 1
【物件名】 明細書 1
【物件名】 図面 1
【物件名】 要約書 1

【書類名】特許請求の範囲

【請求項 1】

下記一般式〔1〕の化学組成を有する結晶相を有する蛍光体。

【化 1】



(但し、 M^1 は、1価の元素、 Eu 、 Mn 、 Mg を除く2価の元素、3価の元素、5価の元素の群から選ばれる少なくとも1種の元素であって、2価の元素が占める割合が80mol%以上であり、 Ba 、 Ca 、 Sr の合計が占める割合が40mol%以上であり、 Ba と Ca の合計に対する Ca の割合(モル比)が0.2以上0.9以下である。 M^2 は、 Si および Ge を合計で90mol%以上含む4価の元素群を表し、 Z は、-1価、-2価の元素、 H 、 N からなる群から選ばれる少なくとも1種の元素である。 a は $0.001 \leq a \leq 0.8$ 、 b は $0 < b \leq 0.8$ 、 c 、 d は $0 < c/d \leq 0.8$ 、 a 、 b 、 c 、 d は $1.8 \leq (a+b+c+d) \leq 2.2$ 、 e 、 f は $0 \leq e/f \leq 0.035$ 、および $3.6 \leq (e+f) \leq 4.4$ を満足する数である。)

【請求項 2】

M^1 の中で Ba 、 Ca 、 Sr の合計が占める割合が80mol%以上であることを特徴とする請求項1に記載の蛍光体。

【請求項 3】

M^2 の中で Si が占める割合が80mol%以上であることを特徴とする1又は2に記載の蛍光体。

【請求項 4】

350—430nmの光を発生する第1の発光体と、当該第1の発光体からの光の照射によって可視光を発生する第2の発光体とを有する発光装置において、第2の発光体が、請求項1～3のいずれか1項に記載の蛍光体を含有してなることを特徴とする発光装置。

【請求項 5】

第1の発光体がレーザーダイオード又は発光ダイオードであることを特徴とする請求項4に記載の発光装置。

【請求項 6】

請求項4又は5に記載の発光装置を有する照明装置。

【請求項 7】

請求項4又は5に記載の発光装置を有する画像表示装置。

【書類名】明細書

【発明の名称】蛍光体、及びそれを用いた発光装置、照明装置、ならびに画像表示装置

【技術分野】

【0001】

本発明は、紫外光又は可視光領域にある光を吸収し長波長の可視光を発する母体化合物が付活元素を含有する蛍光体、及び、それを第2の発光体とし、電力源により紫外光から可視光領域の光を発光する第1の発光体と第2の発光体を組み合わせることにより、使用環境によらず高強度の発光を発生させることのできる発光装置に関する。

【背景技術】

【0002】

従来より、紫外光により赤色に発光する多数の蛍光体が知られており、また、白色に発光する蛍光体も知られている。赤色蛍光体は照明用として他の発光色の蛍光体と混合して白色として使用される。これらの中で、製造が容易であり、かつ、安定な蛍光体は、Sおよびハロゲンがほとんど含有されていない酸化物である。Sおよびハロゲンがほとんど含有されていない酸化物とは、結晶中のSおよびハロゲン元素の含有率が不純物レベル以下、即ち、目安として2mol%以下である酸化物のことである。 $\text{La}_2\text{O}_2\text{S} : \text{Eu}$ といった、Sを結晶構成元素として含有している酸化物は、大気や空気中の水の存在下で紫外光照射時安定でないからであり、 $\text{Ca}_5(\text{PO}_4)_3(\text{F}, \text{Cl}) : \text{Sb}, \text{Mn}$ といった、Cl等のハロゲンを結晶構成元素として含有している酸化物は、製造時腐食の懸念があり、製造が容易でないからである。Sおよびハロゲンがほとんど含有されていない酸化物の中で、赤色に発光する蛍光体として、 $\text{Y}_2\text{O}_3 : \text{Eu}$, $\text{Y}(\text{P}, \text{V})\text{O}_4 : \text{Eu}$ が、白色に発光する蛍光体として、 $\text{YVO}_4 : \text{Dy}$ が挙げられる。（例えば、蛍光体ハンドブック（蛍光体同学会編、オーム社、1987）に記載されている。）上記赤色蛍光体はEu3+のf-f遷移過程で発光し、線スペクトルを与えることから、これに青色と緑色の蛍光体を組み合わせても演色性の低い白色光しか得られない。演色性は、異なる発光色を混合して白色光を発生させる場合に問題とする因子の一つであり、太陽光で照らされた物体の色の見え方に対し、蛍光体が発する光で照らされた物体の色の見え方がどの程度近いかを表す尺度であるが、蛍光体の発光スペクトルの半値幅が広くなるほど、演色性が高くなる傾向にある。赤色、緑色、青色の蛍光体を混合して白色光を発生させる場合、赤色の発光ピーク幅が小さいと、合成したスペクトルにおいて、緑色ピークとの間、即ち、550-590nmの領域に大きな谷間ができてしまい、その領域に谷間のない太陽光スペクトルと一致させることができず、演色性が低くなってしまう。この理由から、半値幅が20nm未満である、線スペクトルの上記の赤色蛍光体では演色性の高い白色光を得ることは困難である。また、上記の白色に発光する蛍光体もやはり演色性が低い。これは、補色関係にある480nm付近の青色と570nm付近の黄色により白色発光をするものであり、赤成分、緑成分が足りないため、演色性が低い。このように、Sおよびハロゲンがほとんど含有されていない従来の赤色、白色蛍光体では、良好な演色性を与えることはできなかつた。

【0003】

また、近年、Sおよびハロゲンがほとんど含有されていない赤色又は白色蛍光体を、低電圧で強度の強い近紫外光を発するGaN系半導体と組み合わせた、白色発光の発光装置が、消費電力が小さく長寿命な画像表示装置や照明装置の発光源として提案されており、組み合わせる蛍光体が赤色蛍光体の場合の例として、 $\text{Y}_2\text{O}_3 : \text{Eu}$ が挙げられるが、 $\text{Y}_2\text{O}_3 : \text{Eu}$ と青色、緑色蛍光体、及び近紫外光発光源とを組み合わせた時に得られる白色の演色性は、先述と同様の理由から低く、発光強度も低い。組み合わせる蛍光体が白色蛍光体の場合の例として、特開2002-359404号公報に、リン酸塩及び/又はホウ酸塩蛍光体を使用する方法が示されている。しかしながら、本方法では、青から赤の領域にさしかかった、幅の十分に広い発光スペクトルが得られず、演色性が低い。

【0004】

上述の如く、従来の、製造が容易で安定なタイプの赤色、白色蛍光体を組み込んだ照明

装置や画像表示装置は、高い演色性を与えるものでなかった。

【特許文献 1】特開 2002-359404 号公報

【発明の開示】

【発明が解決しようとする課題】

【0005】

本発明は、前述の従来技術に鑑み、高い演色性を与える、言い換えれば、幅の広い発光ピークを与える赤色又は白色蛍光体、特に、近紫外光源と組み合わせて演色性、強度がともに高い赤色又は白色の発光を与える蛍光体であって、かつ、製造が容易で安定な蛍光体を提供することを目的とする。

【課題を解決するための手段】

【0006】

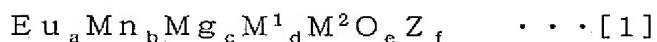
本発明者は、前記課題を解決すべく鋭意検討した結果、半値幅の大きな赤色発光ピークを与える、または、赤色はもとより、緑色、青色の領域にまたがる非常に大きな幅を持つ発光スペクトルを与える蛍光体であって、かつ、350-430 nm の光の照射を受けて、赤色又は白色に強く発光する蛍光体を、具体的には、Eu および Mn で付活され、Ca が Ba に対して十分な割合で共存し、Mg を含有する M_2SiO_4 型の珪酸塩を見い出し、本発明に到達した。特に、本発明の赤色蛍光体は発光ピーク波長が 590-620 nm 内にあるため、明るく感じられる赤みを発するという特徴を備えている。

【0007】

即ち、本発明は、下記一般式 [1] の化学組成を有する結晶相を有する蛍光体をその第一の要旨とし、350-430 nm の光を発生する第 1 の発光体と、当該第 1 の発光体からの光の照射によって可視光を発生する第 2 の発光体とを有する発光装置において、前記第 2 の発光体が、下記一般式 [1] の化学組成を有する結晶相を有する蛍光体であることを特徴とする発光装置をその第二の要旨とする。

【0008】

【化 2】



【0009】

(但し、 M^1 は、1 価の元素、Eu, Mn, Mg を除く 2 価の元素、3 価の元素、5 価の元素の群から選ばれる少なくとも 1 種の元素を表し、2 価の元素が占める割合が 80 mol % 以上であり、Ba, Ca, Sr の合計が占める割合が 40 mol % 以上であり、Ba と Ca の合計に対する Ca の割合 (モル比) が 0.2 以上 0.9 以下である。 M^2 は、Si および Ge を合計で 90 mol % 以上含む 4 価の元素群を表し、乙は、-1 価、-2 価の元素、H, N からなる群から選ばれる少なくとも 1 種の元素である。a は $0.001 \leq a \leq 0.8$ 、b は $0 < b \leq 0.8$ 、c, d は $0 < c/(c+d) \leq 0.8$ 、a, b, c, d は $1.8 \leq (a+b+c+d) \leq 2.2$ 、e, f は $0 \leq f/(e+f) \leq 0.035$ 、および $3.6 \leq (e+f) \leq 4.4$ を満足する数である。)

【発明の効果】

【0010】

本発明によれば、演色性が高い赤色又は白色蛍光体、かつ、演色性の高い発光装置を提供することができる。

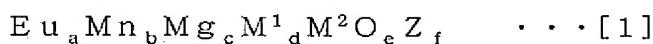
【発明を実施するための最良の形態】

【0011】

以下、本発明の実施の形態について詳細に説明するが、本発明は以下の実施の形態に限定されるものではなく、その要旨の範囲内で種々変形して実施することができる。

本発明は、下記一般式 [1] の化学組成を有する結晶相を有する蛍光体であり、そして、下記一般式 [1] の化学組成を有する結晶相を有する蛍光体と、それに 350-430 nm の光を照射させるための発光源とを有する発光装置である。

【0012】
【化3】



【0013】

式【1】中の M^1 は、1価の元素、Eu, Mn, Mgを除く2価の元素、3価の元素、5価の元素の群から選ばれる少なくとも1種の元素を表し、2価の元素が占める割合が80mol%以上であり、Ba, Ca, Srの合計が占める割合が40mol%以上であり、BaとCaの合計に対するCaの割合(モル比)が0.2以上0.9以下という条件を満たすものである。Ba, Ca, Sr以外の元素を具体的に述べると、1価の元素としては、Li, Na, K, Rb, Cs等が挙げられ、2価の元素としては、V, Cr, Fe, Co, Ni, Cu, Zn, Mo, Ru, Pd, Ag, Cd, Sn, Sm, Tm, Yb, W, Re, Os, Ir, Pt, Hg, Pb等が挙げられ、3価の元素としては、B, Al, Ga, In等や、Y, Sc等の希土類元素が挙げられ、5価の元素としては、P, Sb, Biが挙げられるが、これらに限定されるものではない。中でも、2価の元素においてはV, Zn, Mo, Sn, Sm, Tm, Yb, W, Pbは性能に影響しにくい。

【0014】

M^1 中2価の元素及び付活元素Eu²⁺とMn²⁺の焼成時の固体内拡散による珪酸塗の結晶化を助ける意味で、1価、3価、5価の元素を合計20mol%以内で導入しても良い。赤色又は白色の発光強度等の面から、BaとCaの合計に対するCaの割合(モル比)が0.2以上0.8以下であることが好ましい。赤色又は白色の発光強度等の面から、Ba, Ca, Srの合計が占める割合が80mol%以上であることが好ましく、Ba, Caの合計が占める割合が80mol%以上であることがより好ましく、Ba, Ca, Srの合計が占める割合が100mol%であることが更に好ましい。

【0015】

式【1】中の M^2 は、SiおよびGeを合計で90mol%以上含む4価の元素群を表すが、赤色又は白色の発光強度等の面から、 M^2 がSiを80mol%以上含むことが好ましく、 M^2 がSiからなることがより好ましい。Si, Ge以外の4価の元素としては、Zn, Ti, Hf等が挙げられ、赤色又は白色の発光強度等の点から、性能を損なわない範囲でこれらを含んでいてもよい。

【0016】

式【1】中のZは、-1価、-2価の元素、H, Nからなる群から選ばれる少なくとも1種の元素であり、例えば、酸素と同じ-2価の元素であるS, Se, Te以外に-1価であるF, Cl, Br, I等であってもよいし、OH基が含有されていてもよいし、酸素基が一部ON基やN基に変わっていてもよい。また、Zは、蛍光性能には影響が少ない程度、即ち、不純物レベルの対全元素比約2mol%以下で含まれていてもよい。これは、(Z+酸素原子)に対するZのモル比としては0.035以下に相当する。よって、(Z+酸素原子)に対するZのモル比である $f/(e+f)$ の範囲は $0 \leq f/(e+f) \leq 0.035$ であり、蛍光体の性能の点から、 $f/(e+f) \leq 0.01$ が好ましく、通常使用においては $f/(e+f) = 0$ が好ましい。

【0017】

式【1】中のEuモル比aについては、aは、 $0.001 \leq a \leq 0.8$ を満足する数であるが、発光中心イオンEu²⁺のモル比aが小さすぎると、発光強度が小さくなる傾向があり、一方、多すぎても、濃度消光や温度消光と呼ばれる現象によりやはり発光強度が小さくなる傾向があるため、下限としては、 $0.005 \leq a$ が好ましく、 $0.02 \leq a$ がより好ましく、上限としては、 $a \leq 0.5$ がより好ましい。

【0018】

式【1】中のMnモル比bは、赤色発光とするか白色発光とするかを左右する因子であり、bが0の場合、赤色ピークが得られず、青もしくは青緑ピークのみであるが、bが小

さな正の値をとると、青、緑ピークに赤色ピークが現れ、全体として白色発光となり、 b がより大きな正の値をとると、青、緑ピークがほとんど消失し、赤色ピークが主となる。 b の範囲は、赤色蛍光体又は白色蛍光体として、 b は $0 < b \leq 0.8$ である。蛍光体が励起光源の照射を受けて励起した Eu^{2+} のエネルギーが Mn^{2+} に移動し、 Mn^{2+} が赤色発光しているものと考えられ、主に M^1 と M^2 の組成によってエネルギー移動の程度が多少異なるので、 M^1 と M^2 の組成によって赤色蛍光体から白色蛍光体に切り替わる b の境界値が多少異なる。それゆえ、赤色発光と白色発光の b の良好な範囲を厳密に区別できないが、白色蛍光体としては、 $0 < b \leq 0.15$ が好ましく、 $0.01 \leq b \leq 0.15$ がより好ましく、赤色蛍光体としては、 $0.03 \leq b \leq 0.8$ が好ましく、 $0.06 \leq b \leq 0.4$ がより好ましい。

【0019】

式【1】中の Mg は、2価元素が主である M^1 に置換され、 Mg と M^1 の合計モル数に対する Mg のモル数の割合である $c / (c + d)$ が、 $0 < c / (c + d) \leq 0.8$ であるが、赤色又は白色の発光強度等の面から、 $0 < c / (c + d) \leq 0.7$ が好ましい。

前記一般式【1】の結晶相 $\text{Eu}_a\text{Mn}_b\text{Mg}_c\text{M}^1_d\text{M}^2_e\text{O}_f\text{Z}_g$ においては、 Eu^{2+} 、 Mn^{2+} 、 Mg^{2+} は主に2価元素からなる M^1 に置換され、 M^2 は主に Si と Ge で占められ、アニオンは主に酸素であり、その基本組成は、 M^1 、 M^2 、酸素原子の総モル比がそれぞれ 2、1、4 のものであるが、カチオン欠損やアニオン欠損が多少生じていっても本目的の蛍光性能に大きな影響がないので、 Si と Ge が主に占める M^2 の全モル比を化学式上で 1 と固定したときに、 $(M^1 + \text{Eu} + \text{Mn} + Mg)$ のモル比 $(a + b + c + d)$ は、 $1.8 \leq (a + b + c + d) \leq 2.2$ の範囲であり、中でも $(a + b + c + d) = 2$ があることが好ましい。又、アニオン側のサイトの全モル比である $(e + f)$ は、 $3.6 \leq (e + f) \leq 4.4$ の範囲であり、中でも、通常使用においては $e = 4$ 、かつ $f = 0$ があることが好ましい。

【0020】

本発明で使用する蛍光体は、前記一般式【1】に示されるような M^1 源、 M^2 源、 Mg 源、及び、付活元素である Eu と Mn の元素源化合物を下記の(A) 又は(B) の混合法により調製した混合物を加熱処理して焼成することにより製造することができる。

(A) ハンマーミル、ロールミル、ボールミル、ジェットミル等の乾式粉碎機、又は、乳鉢と乳棒等を用いる粉碎と、リボンブレンダー、V型ブレンダー、ヘンシェルミキサー等の混合機、又は、乳鉢と乳棒を用いる混合とを合わせた乾式混合法。

(B) 粉碎機、又は、乳鉢と乳棒等を用いて、水等を加えてスラリー状態又は溶液状態で、粉碎機、乳鉢と乳棒、又は蒸発皿と攪拌棒等により混合し、噴霧乾燥、加熱乾燥、又は自然乾燥等により乾燥させる湿式混合法。

【0021】

これらの混合法の中で、特に、付活元素の元素源化合物においては、少量の化合物を全体に均一に混合、分散させることから液体媒体を用いるのが好ましく、又、他の元素源化合物において全体に均一な混合が得られる面からも、後者湿式法が好ましく、又、加熱処理法としては、アルミナや石英製の坩堝やトレイ等の耐熱容器中で、通常 $750 \sim 1400^\circ\text{C}$ 、好ましくは $900 \sim 1300^\circ\text{C}$ の温度で、大気、酸素、一酸化炭素、二酸化炭素、窒素、水素、アルゴン等の気体の単独或いは混合雰囲気下、10分～24時間、加熱することによりなされる。尚、加熱処理後、必要に応じて、洗浄、乾燥、分級処理等がなされる。

【0022】

尚、前記加熱雰囲気としては、付活元素が発光に寄与するイオン状態(価数)を得るために必要な雰囲気が選択される。本発明における2価の Eu と Mn 等の場合には、一酸化炭素、窒素、水素、アルゴン等の中性若しくは還元雰囲気下が好ましいが、大気、酸素等の酸化雰囲気下も条件さえ選べば可能である。

又、ここで、 M^1 源、 M^2 源、 Mg 源、及び、付活元素の元素源化合物としては、 M^1 、 M^2 、 Mg 、及び、付活元素の各酸化物、水酸化物、炭酸塩、硝酸塩、硫酸塩、磷酸塩

、カルボン酸塩、ハロゲン化物等が挙げられ、これらの中から、複合酸化物への反応性、及び、焼成時におけるNO_x、SO_x等の非発生性等を考慮して選択される。

【0023】

M¹として挙げられている前記Ba、Ca、Srについて、それらのM¹源化合物を具体的に例示すれば、Ba源化合物としては、BaO、Ba(OH)₂・8H₂O、BaCO₃、Ba(NO₃)₂、BaSO₄、Ba(OCO)₂・2H₂O、Ba(OCOCH₃)₂、BaCl₂等が、又、Ca源化合物としては、CaO、Ca(OH)₂、CaCO₃、Ca(NO₃)₂・4H₂O、CaSO₄・2H₂O、Ca(OCO)₂・H₂O、Ca(OCOCH₃)₂・H₂O、CaCl₂等が、又、Sr源化合物としては、SrO、Sr(OH)₂・8H₂O、SrCO₃、Sr(NO₃)₂、SrSO₄、Sr(CO)₂・H₂O、Sr(OCOCH₃)₂・0.5H₂O、SrCl₂等がそれぞれ挙げられる。

【0024】

M²として挙げられている前記Si、Geについて、それらのM²源化合物を具体的に例示すれば、Si源化合物とは、SiO₂、H₄SiO₄、Si(OCOCH₃)₄等が、又、Ge源化合物とは、GeO₂、Ge(OH)₄、Ge(OCOCH₃)₄、GeCl₄等がそれぞれ挙げられる。

Mgについて、Mg源化合物を具体的に例示すれば、MgO、Mg(OH)₂、MgCO₃、Mg(OH)₂・3MgCO₃・3H₂O、Mg(NO₃)₂・6H₂O、MgSO₄、Mg(OCO)₂・2H₂O、Mg(OCOCH₃)₂・4H₂O、MgCl₂等がそれぞれ挙げられる。

【0025】

更に、付活元素として挙げられる前記EuとMnについて、その元素源化合物を具体的に例示すれば、Eu₂O₃、Eu₂(SO₄)₃、Eu₂(OCO)₆、EuCl₂、EuCl₃、Eu(NO₃)₃・6H₂O、Mn(NO₃)₂・6H₂O、MnO₂、Mn₂O₃、Mn₃O₄、MnO、Mn(OH)₂、MnCO₃、Mn(OCOCH₃)₂・2H₂O、Mn(OCOCH₃)₃・nH₂O、MnCl₂・4H₂O等が挙げられる。

【0026】

本発明において、前記蛍光体に光を照射する第1の発光体は、波長350—430nmの光を発生する。好ましくは波長350—430nmの範囲にピーク波長を有する光を発生する発光体を使用する。第1の発光体の具体例としては、発光ダイオード(LED)またはレーザーダイオード(LD)等を挙げることができる。消費電力が良く少ない点でより好ましくはレーザーダイオードである。その中で、GaN系化合物半導体を使用した、GaN系LEDやLDが好ましい。なぜなら、GaN系LEDやLDは、この領域の光を発するSiC系LED等に比し、発光出力や外部量子効率が格段に大きく、前記蛍光体と組み合わせることによって、非常に低電力で非常に明るい発光が得られるからである。例えば、20mAの電流負荷に対し、通常GaN系はSiC系の100倍以上の発光強度を有する。GaN系LEDやLDにおいては、Al_XGa_YN発光層、GaN発光層、またはIn_XGa_YN発光層を有しているものが好ましい。GaN系LEDにおいては、それの中でIn_XGa_YN発光層を有するものが発光強度が非常に強いので、特に好ましく、GaN系LDにおいては、In_XGa_YN層とGaN層の多重量子井戸構造のものが発光強度が非常に強いので、特に好ましい。なお、上記においてX+Yの値は通常0.8~1.2の範囲の値である。GaN系LEDにおいて、これら発光層にZnやSiをドープしたものやドーパント無しのものが発光特性を調節する上で好ましいものである。GaN系LEDはこれら発光層、p層、n層、電極、および基板を基本構成要素としたものであり、発光層をn型とp型のAl_XGa_YN層、GaN層、またはIn_XGa_YN層などでサンドイッチにしたヘテロ構造を有しているものが発光効率が高く、好ましく、さらにヘテロ構造を量子井戸構造にしたものが発光効率がさらに高く、より好ましい。

【0027】

本発明においては、面発光型の発光体、特に面発光型GaN系レーザーダイオードを第

1の発光体として使用することは、発光装置全体の発光効率を高めることになるので、特に好ましい。面発光型の発光体とは、膜の面方向に強い発光を有する発光体であり、面発光型GaN系レーザーダイオードにおいては、発光層等の結晶成長を制御し、かつ、反射層等をうまく工夫することにより、発光層の縁方向よりも面方向の発光を強くすることができます。面発光型のものを使用することによって、発光層の縁から発光するタイプに比べ、単位発光量あたりの発光断面積が大きくとれる結果、第2の発光体の蛍光体にその光を照射する場合、同じ光量で照射面積を非常に大きくすることができ、照射効率を良くすることができるので、第2の発光体である蛍光体からより強い発光を得ることができます。

【0028】

第1の発光体として面発光型のものを使用する場合、第2の発光体を膜状とするのが好ましい。その結果、面発光型の発光体からの光は断面積が十分大きいので、第2の発光体をその断面の方向に膜状とすると、第1の発光体からの蛍光体への照射断面積が蛍光体単位量あたり大きくなるので、蛍光体からの発光の強度をより大きくすることができます。

また、第1の発光体として面発光型のものを使用し、第2の発光体として膜状のものを用いる場合、第1の発光体の発光面に、直接膜状の第2の発光体を接触させた形状とするのが好ましい。ここでいう接触とは、第1の発光体と第2の発光体とが空気や気体を介さないでぴたりと接している状態をつくることを言う。その結果、第1の発光体からの光が第2の発光体の膜面で反射されて外にしみ出るという光量損失を避けることができるので、装置全体の発光効率を良くすることができます。

【0029】

本発明の発光装置の一例における第1の発光体と第2の発光体との位置関係を示す模式的斜視図を図1に示す。図1中の1は、前記蛍光体を有する膜状の第2の発光体、2は第1の発光体としての面発光型GaN系LD、3は基板を表す。相互に接触した状態をつくるために、LD2と第2の発光体1とそれぞれ別個にをつくっておいてそれらの面同士を接着剤やその他の手段によって接触させても良いし、LD2の発光面上に第2の発光体を製膜（成型）させても良い。これらの結果、LD2と第2の発光体1とを接触した状態とすることができます。

【0030】

第1の発光体からの光や第2の発光体からの光は通常四方八方に向いているが、第2の発光体の蛍光体の粉を樹脂中に分散させると、光が樹脂の外に出る時にその一部が反射されるので、ある程度光の向きを揃えられる。従って、効率の良い向きに光をある程度誘導できるので、第2の発光体として、前記蛍光体の粉を樹脂中へ分散したものを使用するのが好ましい。また、蛍光体を樹脂中に分散させると、第1の発光体からの光の第2の発光体への全照射面積が大きくなるので、第2の発光体からの発光強度を大きくすることができますという利点も有する。この場合に使用できる樹脂としては、シリコン樹脂、エポキシ樹脂、ポリビニル系樹脂、ポリエチレン系樹脂、ポリプロピレン系樹脂、ポリエステル系樹脂等各種のものが挙げられるが、蛍光体粉の分散性が良い点で好ましくはシリコン樹脂、もしくはエポキシ樹脂である。第2の発光体の粉を樹脂中に分散させる場合、当該第2の発光体の粉と樹脂の全体に対するその粉の重量比は、通常10～95%、好ましくは20～90%、さらに好ましくは30～80%である。蛍光体が多すぎると粉の凝集により発光効率が低下することがあり、少なすぎると今度は樹脂による光の吸収や散乱のため発光効率が低下することがある。

【0031】

本発明の発光装置は、波長変換材料としての前記蛍光体と、350～430nmの光を発生する発光素子とから構成されてなり、前記蛍光体が発光素子の発する350～430nmの光を吸収して、使用環境によらず演色性が良く、かつ、高強度の可視光を発生させることのできる発光装置であり、発光装置を構成する、本発明の結晶相を有する蛍光体は、350～430nmの光を発生する第1の発光体からの光の照射により、赤色又は白色を表す波長領域に発光している。そして、本発明の発光装置は、バックライト光源、信号機などの発光源、又、カラー液晶ディスプレイ等の画像表示装置や面発光等の照明装置等

の光源に適している。

【0032】

本発明の発光装置を図面に基づいて説明すると、図2は、第1の発光体(350-430nm発光体)と第2の発光体とを有する発光装置の一実施例を示す模式的断面図であり、4は発光装置、5はマウントリード、6はインナーリード、7は第1の発光体(350-430nmの発光体)、8は第2の発光体としての蛍光体含有樹脂部、9は導電性ワイヤー、10はモールド部材である。

【0033】

本発明の一例である発光装置は、図2に示されるように、一般的な砲弾型の形態をなし、マウントリード5の上部カップ内には、GaN系発光ダイオード等からなる第1の発光体(350-430nm発光体)7が、その上に、蛍光体をシリコン樹脂、エポキシ樹脂やアクリル樹脂等のバインダーに混合、分散させ、カップ内に流し込むことにより第2の発光体として形成された蛍光体含有樹脂部8で被覆されることにより固定されている。一方、第1の発光体7とマウントリード5、及び第1の発光体7とインナーリード6は、それぞれ導電性ワイヤー9で導通されており、これら全体がエポキシ樹脂等によるモールド部材10で被覆、保護されてなる。

【0034】

又、この発光素子1を組み込んだ面発光照明装置11は、図3に示されるように、内面を白色の平滑面等の光不透過性とした方形の保持ケース12の底面に、多数の発光装置13を、その外側に発光装置13の駆動のための電源及び回路等(図示せず。)を設けて配置し、保持ケース12の蓋部に相当する箇所に、乳白色としたアクリル板等の拡散板14を発光の均一化のために固定してなる。

【0035】

そして、面発光照明装置11を駆動して、発光素子13の第1の発光体に電圧を印加することにより350-430nmの光を発光させ、その発光の一部を、第2の発光体としての蛍光体含有樹脂部における前記蛍光体が吸収し、可視光を発光し、一方、蛍光体に吸収されなかった青色光等との混色により演色性の高い発光が得られ、この光が拡散板14を透過して、図面上方に射出され、保持ケース12の拡散板14面内において均一な明るさの照明光が得られることとなる。

【0036】

以下、本発明を実施例によりさらに具体的に説明するが、本発明はその要旨を越えない限り以下の実施例に限定されるものではない。

【実施例1】

【0037】

Ba(NO₃)₂の水溶液、Ca(NO₃)₂·4H₂Oの水溶液、Mg(NO₃)₂·6H₂Oの水溶液、Eu(NO₃)₃·6H₂Oの水溶液、Mn(NO₃)₂·6H₂Oの水溶液、およびコロイダルシリカ(SiO₂)の懸濁液(Ba(NO₃)₂、Ca(NO₃)₂·4H₂O、Mg(NO₃)₂·6H₂O、Eu(NO₃)₃·6H₂O、Mn(NO₃)₂·6H₂O、SiO₂のモル比が1.133:0.378:0.189:0.2:0.1:1)を白金容器中で混合し、乾燥後、4%の水素を含む窒素ガス流下1050°Cで2時間加熱することにより焼成し、蛍光体Ba_{1.133}Ca_{0.378}Mg_{0.189}Eu_{0.2}Mn_{0.1}SiO₄(第2の発光体に用いる蛍光体)を製造した。GaN系発光ダイオードの紫外光領域の主波長である400nmでこの蛍光体を励起したときの発光スペクトルを測定した。表-1に、その発光ピークの波長、後述の比較例3の発光ピークの強度を100としたときの発光ピークの強度(以下、相対強度、という)、及び半値幅を示す。本蛍光体が、半値幅が十分広く、良好な演色性を与える、かつ、ピーク波長が590-620nm内にある浅い赤色を発光するので、明るく感じられる赤みを発することがわかる。

【実施例2】

【0038】

$\text{Ba}(\text{NO}_3)_2$ の水溶液、 $\text{Ca}(\text{NO}_3)_2 \cdot 4\text{H}_2\text{O}$ の水溶液、 $\text{Mg}(\text{NO}_3)_2 \cdot 6\text{H}_2\text{O}$ の水溶液、 $\text{Eu}(\text{NO}_3)_3 \cdot 6\text{H}_2\text{O}$ の水溶液、 $\text{Mn}(\text{NO}_3)_2 \cdot 6\text{H}_2\text{O}$ の水溶液、およびコロイダルシリカ (SiO_2) の懸濁液 ($\text{Ba}(\text{NO}_3)_2$ 、 $\text{Ca}(\text{NO}_3)_2 \cdot 4\text{H}_2\text{O}$ 、 $\text{Mg}(\text{NO}_3)_2 \cdot 6\text{H}_2\text{O}$ 、 $\text{Eu}(\text{NO}_3)_3 \cdot 6\text{H}_2\text{O}$ 、 $\text{Mn}(\text{NO}_3)_2 \cdot 6\text{H}_2\text{O}$ 、 SiO_2 のモル比が $0.85 : 0.425 : 0.425 : 0.2 : 0.1 : 1$) を仕込み原液として使用すること以外は、実施例 1 と同様にして蛍光体 $\text{Ba}_{0.85}\text{Ca}_{0.425}\text{Mg}_{0.425}\text{Eu}_{0.2}\text{Mn}_{0.1}\text{SiO}_4$ を製造した。GaN 系発光ダイオードの紫外光領域の主波長である 400 nm でこの蛍光体を励起したときの発光スペクトルを測定した。表-1 に、その発光ピークの波長、相対強度、及び半値幅を示す。本蛍光体が、半値幅が十分広く、良好な演色性を与えること、かつ、ピーク波長が $590 - 620\text{ nm}$ 内にある浅い赤色を発光するので、明るく感じられる赤みを発することがわかる。

【実施例 3】

【0039】

$\text{Ba}(\text{NO}_3)_2$ の水溶液、 $\text{Ca}(\text{NO}_3)_2 \cdot 4\text{H}_2\text{O}$ の水溶液、 $\text{Mg}(\text{NO}_3)_2 \cdot 6\text{H}_2\text{O}$ の水溶液、 $\text{Eu}(\text{NO}_3)_3 \cdot 6\text{H}_2\text{O}$ の水溶液、 $\text{Mn}(\text{NO}_3)_2 \cdot 6\text{H}_2\text{O}$ の水溶液、およびコロイダルシリカ (SiO_2) の懸濁液 ($\text{Ba}(\text{NO}_3)_2$ 、 $\text{Ca}(\text{NO}_3)_2 \cdot 4\text{H}_2\text{O}$ 、 $\text{Mg}(\text{NO}_3)_2 \cdot 6\text{H}_2\text{O}$ 、 $\text{Eu}(\text{NO}_3)_3 \cdot 6\text{H}_2\text{O}$ 、 $\text{Mn}(\text{NO}_3)_2 \cdot 6\text{H}_2\text{O}$ 、 SiO_2 のモル比が $0.8 : 0.4 : 0.4 : 0.2 : 0.2 : 1$) を仕込み原液として使用すること以外は、実施例 1 と同様にして蛍光体 $\text{Ba}_{0.8}\text{Ca}_{0.4}\text{Mg}_{0.4}\text{Eu}_{0.2}\text{Mn}_{0.2}\text{SiO}_4$ を製造した。GaN 系発光ダイオードの紫外光領域の主波長である 400 nm でこの蛍光体を励起したときの発光スペクトルを測定した。図 4 にその発光スペクトルを示す。発光スペクトル上で励起光源の影響を取り除くため、 420 nm 以下の光をカットするフィルターを導入して測定している。表-1 に、その発光ピークの波長、相対強度、及び半値幅を示す。本蛍光体が、半値幅が十分広く、良好な演色性を与えること、かつ、ピーク波長が $590 - 620\text{ nm}$ 内にある浅い赤色を発光するので、明るく感じられる赤みを発することがわかる。

【実施例 4】

【0040】

$\text{Ba}(\text{NO}_3)_2$ の水溶液、 $\text{Ca}(\text{NO}_3)_2 \cdot 4\text{H}_2\text{O}$ の水溶液、 $\text{Mg}(\text{NO}_3)_2 \cdot 6\text{H}_2\text{O}$ の水溶液、 $\text{Eu}(\text{NO}_3)_3 \cdot 6\text{H}_2\text{O}$ の水溶液、 $\text{Mn}(\text{NO}_3)_2 \cdot 6\text{H}_2\text{O}$ の水溶液、およびコロイダルシリカ (SiO_2) の懸濁液 ($\text{Ba}(\text{NO}_3)_2$ 、 $\text{Ca}(\text{NO}_3)_2 \cdot 4\text{H}_2\text{O}$ 、 $\text{Mg}(\text{NO}_3)_2 \cdot 6\text{H}_2\text{O}$ 、 $\text{Eu}(\text{NO}_3)_3 \cdot 6\text{H}_2\text{O}$ 、 $\text{Mn}(\text{NO}_3)_2 \cdot 6\text{H}_2\text{O}$ 、 SiO_2 のモル比が $0.567 : 0.567 : 0.566 : 0.2 : 0.1 : 1$) を仕込み原液として使用すること以外は、実施例 1 と同様にして蛍光体 $\text{Ba}_{0.567}\text{Ca}_{0.567}\text{Mg}_{0.566}\text{Eu}_{0.2}\text{Mn}_{0.1}\text{SiO}_4$ を製造した。GaN 系発光ダイオードの紫外光領域の主波長である 400 nm でこの蛍光体を励起したときの発光スペクトルを測定した。表-1 に、その発光ピークの波長、相対強度、及び半値幅を示す。本蛍光体が、半値幅が十分広く、良好な演色性を与えること、かつ、ピーク波長が $590 - 620\text{ nm}$ 内にある浅い赤色を発光するので、明るく感じられる赤みを発することがわかる。

【0041】

(比較例 1)

$\text{Ba}(\text{NO}_3)_2$ の水溶液、 $\text{Ca}(\text{NO}_3)_2 \cdot 4\text{H}_2\text{O}$ の水溶液、 $\text{Mg}(\text{NO}_3)_2 \cdot 6\text{H}_2\text{O}$ の水溶液、 $\text{Eu}(\text{NO}_3)_3 \cdot 6\text{H}_2\text{O}$ の水溶液、およびコロイダルシリカ (SiO_2) の懸濁液 ($\text{Ba}(\text{NO}_3)_2$ 、 $\text{Ca}(\text{NO}_3)_2 \cdot 4\text{H}_2\text{O}$ 、 $\text{Mg}(\text{NO}_3)_2 \cdot 6\text{H}_2\text{O}$ 、 $\text{Eu}(\text{NO}_3)_3 \cdot 6\text{H}_2\text{O}$ 、 SiO_2 のモル比が $1.2 : 0.4 : 0.2 : 0.2 : 0.2 : 1$) を仕込み原液として使用すること以外は、実施例 1 と同様にして蛍光体 $\text{Ba}_{1.2}\text{Ca}_{0.4}\text{Mg}_{0.2}\text{Eu}_{0.2}\text{SiO}_4$ を製造した。GaN 系発光ダイオードの紫外光領域の主波長である 400 nm でこの蛍光体を励起したときの発光スペクトル

を測定した。表一に、その発光ピークの波長、相対強度、及び半値幅を示す。実施例1の組成においてMnが添加されないと、赤色ピークが現れないことがわかる。

【0042】

(比較例2)

Ba(NO₃)₂の水溶液、Ca(NO₃)₂・4H₂Oの水溶液、Eu(NO₃)₃・6H₂Oの水溶液、およびコロイダルシリカ(SiO₂)の懸濁液(Ba(NO₃)₂・Ca(NO₃)₂・4H₂O、Eu(NO₃)₃・6H₂O、SiO₂のモル比が0.72:1.08:0.2:1)を仕込み原液として使用すること以外は、実施例1と同様にして蛍光体Ba_{0.72}Ca_{1.08}Eu_{0.2}SiO₄を製造した。GaN系発光ダイオードの紫外光領域の主波長である400nmでこの蛍光体を励起したときの発光スペクトルを測定した。表一に、その発光ピークの波長、相対強度、及び半値幅を示す。Mn成分又はMg成分がない結晶では赤色ピークが現れないことがわかる。

【0043】

(比較例3)

Ba(NO₃)₂の水溶液、Eu(NO₃)₃・6H₂Oの水溶液、Mn(NO₃)₂・6H₂Oの水溶液、およびコロイダルシリカ(SiO₂)の懸濁液(Ba(NO₃)₂・Eu(NO₃)₃・6H₂O、Mn(NO₃)₂・6H₂O、SiO₂のモル比が1.6:0.2:0.2:1)を仕込み原液として使用すること以外は、実施例1と同様にして蛍光体Ba_{1.6}Eu_{0.2}Mn_{0.2}SiO₄を製造した。GaN系発光ダイオードの紫外光領域の主波長である400nmでこの蛍光体を励起したときの発光スペクトルを測定した。表一に、その発光ピークの波長、相対強度、及び半値幅を示す。結晶中にMnが含まれていても、Ca又はMgがないと、赤色ピークが現れないことがわかる。

【0044】

(比較例4)

Ca(NO₃)₂・4H₂Oの水溶液、Eu(NO₃)₃・6H₂Oの水溶液、Mn(NO₃)₂・6H₂Oの水溶液、およびコロイダルシリカ(SiO₂)の懸濁液(Ca(NO₃)₂・4H₂O、Eu(NO₃)₃・6H₂O、Mn(NO₃)₂・6H₂O、SiO₂のモル比が1.6:0.2:0.2:1)を仕込み原液として使用すること以外は、実施例1と同様にして蛍光体Ca_{1.6}Eu_{0.2}Mn_{0.2}SiO₄を製造した。GaN系発光ダイオードの紫外光領域の主波長である400nmでこの蛍光体を励起したときの発光スペクトルを測定した。表一に、その発光ピークの波長、相対強度、及び半値幅を示す。結晶中にMnが含まれていても、Ba又はMgがないと、赤色ピークが現れないことがわかる。

【0045】

(比較例5)

Ba(NO₃)₂の水溶液、Mg(NO₃)₂・6H₂Oの水溶液、Eu(NO₃)₃・6H₂Oの水溶液、Mn(NO₃)₂・6H₂Oの水溶液、およびコロイダルシリカ(SiO₂)の懸濁液(Ba(NO₃)₂・Mg(NO₃)₂・6H₂O、Eu(NO₃)₃・6H₂O、Mn(NO₃)₂・6H₂O、SiO₂のモル比が0.587:1.173:0.2:0.04:1)を仕込み原液として使用すること以外は、実施例1と同様にして蛍光体Ba_{0.587}Mg_{1.173}Eu_{0.2}Mn_{0.04}SiO₄を製造した。GaN系発光ダイオードの紫外光領域の主波長である400nmでこの蛍光体を励起したときの発光スペクトルを測定した。表一に、その発光ピークの波長、相対強度、及び半値幅を示す。結晶中において、CaがBaに対して適当量存在しないと、ピーク波長が620nmを超えてしまい、明るく感じられる赤みを出すことができないことがわかる。

【0046】

【表1】

表-1

実施例又 は比較例	蛍光体の化学組成	発光ピーク の波長 (nm)	発光ピーク の相対強度 (nm)	発光ピーク の半値幅 (nm)	Mn ²⁺ モル比	Eu,Mnを除く 2価,1価,3価, 5価元素の 合計に対する Mgの割合 (モル比)	BaとCaの 合計に対する Caの割合 (モル比)
							Eu,Mnを除く 2価,1価,3価, 5価元素の 合計に対する Mgの割合 (モル比)
実施例1	Ba _{1.33} Ca _{0.378} Mg _{0.189} Eu _{0.2} Mn _{0.1} SiO ₄	602	147	73	0.1	0.11	0.25
実施例2	Ba _{0.85} Ca _{0.425} Mg _{0.425} Eu _{0.2} Mn _{0.1} SiO ₄	609	131	76	0.1	0.25	0.33
実施例3	Ba _{0.8} Ca _{0.4} Mg _{0.4} Eu _{0.2} Mn _{0.2} SiO ₄	612	85	81	0.2	0.25	0.33
実施例4	Ba _{0.557} Ca _{1.567} Mg _{0.568} Eu _{0.2} Mn _{0.1} SiO ₄	602	74	95	0.1	0.33	0.50
比較例1	Ba ₂ Ca _{0.4} Mg _{0.2} Eu _{0.2} SiO ₄	496	183	122	0	0.11	0.25
比較例2	Ba _{0.12} Ca _{1.08} Eu _{0.2} SiO ₄	448	99	104	0	0	0.60
比較例3	Ba _{1.8} Eu _{0.2} Mn _{0.2} SiO ₄	509	100	62	0.2	0	0.00
比較例4	Ca _{1.6} Eu _{0.2} Mn _{0.2} SiO ₄	512	25	85	0.2	0	1.00
比較例5	Ba _{0.887} Mg _{1.173} Eu _{0.2} Mn _{0.04} SiO ₄	630	94	74	0.04	0.67	0.00

【実施例5】

【0047】

Ba(NO₃)₂の水溶液、Ca(NO₃)₂・4H₂Oの水溶液、Mg(NO₃)₂・6H₂Oの水溶液、Eu(NO₃)₃・6H₂Oの水溶液、Mn(NO₃)₂・6H₂Oの水溶液、およびコロイダルシリカ(SiO₂)の懸濁液(Ba(NO₃)₂、Ca(

NO_3)₂ · 4 H_2O 、 $\text{Mg}(\text{NO}_3)_2$ · 6 H_2O 、 $\text{Eu}(\text{NO}_3)_3$ · 6 H_2O 、 $\text{Mn}(\text{NO}_3)_2$ · 6 H_2O 、 SiO_2 のモル比が 1.173 : 0.391 : 0.196 : 0.2 : 0.04 : 1) を仕込み原液として使用すること以外は、実施例 1 と同様にして蛍光体 $\text{Ba}_{1.173}\text{Ca}_{0.391}\text{Mg}_{0.196}\text{Eu}_{0.2}\text{Mn}_{0.04}\text{SiO}_4$ を製造した。GaN 系発光ダイオードの紫外光領域の主波長である 400 nm でこの蛍光体を励起したときの発光スペクトルを測定した。図 5 にその発光スペクトルを示す。表-2 に、色を表す色度座標の x 値、y 値、最大ピークの波長、後述の比較例 7 の蛍光体の最大ピークの強度を 100 とした場合の、本蛍光体の最大ピークの強度（以下、最大ピークの相対強度、という）、及び、発光スペクトル中、赤成分がどの程度存在するかを知る目安となる最大ピークの強度に対する 600 nm での強度の割合、ならびにピーク群の半値幅を示す。青・緑・赤成分がともに十分存在し、スペクトル幅が非常に広く、演色性が高い白色発光となっていることがわかる。

【0048】

なお、最大ピークとは、発光スペクトル中に複数のピークが存在する場合、最も強度の高いピークのことを指し、単ピークの場合は、それを指す。また、ピーク群の半値幅とは、発光スペクトルがどれだけ幅広く分布していて、どれだけ演色性が高いかを知る目安となるものであり、図 6 の如く、スペクトル中最大ピークの強度の、半分以上の強度を有する波長領域の幅の総和と定義する。

【実施例 6】

【0049】

$\text{Ba}(\text{NO}_3)_2$ の水溶液、 $\text{Ca}(\text{NO}_3)_2$ · 4 H_2O の水溶液、 $\text{Mg}(\text{NO}_3)_2$ · 6 H_2O の水溶液、 $\text{Eu}(\text{NO}_3)_3$ · 6 H_2O の水溶液、 $\text{Mn}(\text{NO}_3)_2$ · 6 H_2O の水溶液、およびコロイダルシリカ (SiO_2) の懸濁液 ($\text{Ba}(\text{NO}_3)_2$ 、 $\text{Ca}(\text{NO}_3)_2$ · 4 H_2O 、 $\text{Mg}(\text{NO}_3)_2$ · 6 H_2O 、 $\text{Eu}(\text{NO}_3)_3$ · 6 H_2O 、 $\text{Mn}(\text{NO}_3)_2$ · 6 H_2O 、 SiO_2 のモル比が 0.88 : 0.44 : 0.44 : 0.2 : 0.04 : 1) を仕込み原液として使用すること以外は、実施例 1 と同様にして蛍光体 $\text{Ba}_{0.88}\text{Ca}_{0.44}\text{Mg}_{0.44}\text{Eu}_{0.2}\text{Mn}_{0.04}\text{SiO}_4$ を製造した。GaN 系発光ダイオードの紫外光領域の主波長である 400 nm でこの蛍光体を励起したときの発光スペクトルを測定した。表-2 に、色度座標の x 値、y 値、最大ピークの波長、最大ピークの相対強度、最大ピークの強度に対する 600 nm での強度の割合、ピーク群の半値幅を示す。赤成分が十分存在し、スペクトル幅が非常に広く、演色性が高い白色発光となっていることがわかる。

【0050】

(比較例 6)

$\text{Ba}(\text{NO}_3)_2$ の水溶液、 $\text{Ca}(\text{NO}_3)_2$ · 4 H_2O の水溶液、 $\text{Mg}(\text{NO}_3)_2$ · 6 H_2O の水溶液、 $\text{Eu}(\text{NO}_3)_3$ · 6 H_2O の水溶液、およびコロイダルシリカ (SiO_2) の懸濁液 ($\text{Ba}(\text{NO}_3)_2$ 、 $\text{Ca}(\text{NO}_3)_2$ · 4 H_2O 、 $\text{Mg}(\text{NO}_3)_2$ · 6 H_2O 、 $\text{Eu}(\text{NO}_3)_3$ · 6 H_2O 、 SiO_2 のモル比が 1.2 : 0.4 : 0.2 : 0.2 : 1) を仕込み原液として使用すること以外は、実施例 1 と同様にして蛍光体 $\text{Ba}_{1.2}\text{Ca}_{0.4}\text{Mg}_{0.2}\text{Eu}_{0.2}\text{SiO}_4$ を製造した。GaN 系発光ダイオードの紫外光領域の主波長である 400 nm でこの蛍光体を励起したときの発光スペクトルを測定した。表-2 に、色度座標の x 値、y 値、最大ピークの波長、最大ピークの相対強度、最大ピークの強度に対する 600 nm での強度の割合、ピーク群の半値幅を示す。実施例 5 の組成において Mn が添加されないと、白色スペクトルとならないことがわかる。

【0051】

(比較例 7)

$\text{Ba}(\text{NO}_3)_2$ の水溶液、 $\text{Ca}(\text{NO}_3)_2$ · 4 H_2O の水溶液、 $\text{Eu}(\text{NO}_3)_3$ · 6 H_2O の水溶液、およびコロイダルシリカ (SiO_2) の懸濁液 ($\text{Ba}(\text{NO}_3)_2$ 、 $\text{Ca}(\text{NO}_3)_2$ · 4 H_2O 、 $\text{Eu}(\text{NO}_3)_3$ · 6 H_2O 、 SiO_2 のモル比が 0.72 : 1.08 : 0.2 : 1) を仕込み原液として使用すること以外は、実施例 1 と同様

にして蛍光体 $Ba_{0.72}Ca_{1.08}Eu_{0.2}SiO_4$ を製造した。GaN系発光ダイオードの紫外光領域の主波長である400nmでこの蛍光体を励起したときの発光スペクトルを測定した。表-2に、色度座標のx値、y値、最大ピークの波長、最大ピークの相対強度、最大ピークの強度に対する600nmでの強度の割合、ピーク群の半値幅を示す。結晶中Mn又はMgが存在しないと、白色スペクトルとならないことがわかる。

【0052】

(比較例8)

$Ba(NO_3)_2$ の水溶液、 $Mg(NO_3)_2 \cdot 6H_2O$ の水溶液、 $Eu(NO_3)_3 \cdot 6H_2O$ の水溶液、 $Mn(NO_3)_2 \cdot 6H_2O$ の水溶液、およびコロイダルシリカ(SiO_2)の懸濁液($Ba(NO_3)_2$ 、 $Mg(NO_3)_2 \cdot 6H_2O$ 、 $Eu(NO_3)_3 \cdot 6H_2O$ 、 $Mn(NO_3)_2 \cdot 6H_2O$ 、 SiO_2 のモル比が $0.587 : 1.173 : 0.2 : 0.04 : 1$)を仕込み原液として使用すること以外は、実施例1と同様にして蛍光体 $Ba_{0.587}Mg_{1.173}Eu_{0.2}Mn_{0.04}SiO_4$ を製造した。GaN系発光ダイオードの紫外光領域の主波長である400nmでこの蛍光体を励起したときの発光スペクトルを測定した。表-2に、色度座標のx値、y値、最大ピークの波長、最大ピークの相対強度、最大ピークの強度に対する600nmでの強度の割合、ピーク群の半値幅を示す。結晶中において、CaがBaに対して適当量存在しないと、赤色ピークの方の波長が620nmを超えてしまい、明るく感じられる赤みを含まない可視光スペクトルとなってしまうことがわかる。

【0053】

【表 2】

表-2

実施例又 は比較例	蛍光体の化学組成	色度座標		最大ピーク の波長 (nm)	最大ピーク の相対強度 (nm)	600nmでの強度 /最大ピークでの 強度	ピーケ群の 半値幅 (nm)	Mnの モル比	Eu,Mnを除く 2価,1価,3価 5価元素の 合計に対する Mgの割合 (モル比)	BaとCaの 合計に対する Caの割合 (モル比)
		x	y							
実施例5	Ba _{1.73} Ca _{0.31} Mg _{0.196} Eu _{0.02} Mn _{0.04} SiO ₄	0.376	0.345	598	202	1	158	0.04	0.11	0.25
実施例6	Ba _{0.44} Ca _{0.44} Mg _{0.44} Eu _{0.2} Mn _{0.04} SiO ₄	0.356	0.333	600	97	1	172	0.04	0.25	0.33
比較例6	Ba _{1.2} Ca _{0.4} Mg _{0.2} Eu _{0.2} SiO ₄	0.184	0.29	496	185	0.08	122	0	0.11	0.25
比較例7	Ba _{0.72} Ca _{1.08} Eu _{0.2} SiO ₄	0.19	0.229	448	100	0.12	104	0	0	0.60
比較例8	Ba _{0.57} Mg _{1.73} Eu _{0.2} Mn _{0.04} SiO ₄	0.455	0.291	630	96	0.56	74	0.04	0.67	0.00

【図面の簡単な説明】

【0054】

【図1】面発光型GaN系ダイオードに膜状蛍光体を接触又は成型させた発光装置の一例を示す図。

【図2】本発明中の蛍光体と、第1の発光体(350-430nm発光体)とから構

成される発光装置の一実施例を示す模式的断面図である。

【図3】本発明の面発光照明装置の一例を示す模式的断面図。

【図4】GaN系発光ダイオードの紫外光領域の主波長である400nmの光の照射を受けたときの実施例3の蛍光体の発光スペクトル。

【図5】GaN系発光ダイオードの紫外光領域の主波長である400nmの光の照射を受けたときの実施例5の蛍光体の発光スペクトル。

【図6】ピーク群の半値幅を測定する方法を表した図。

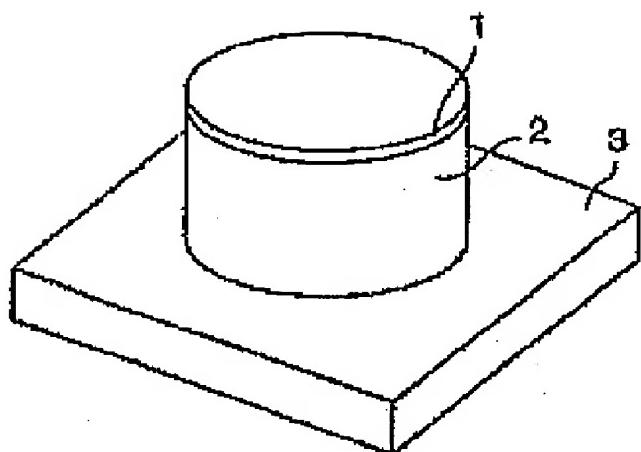
【符号の説明】

【0055】

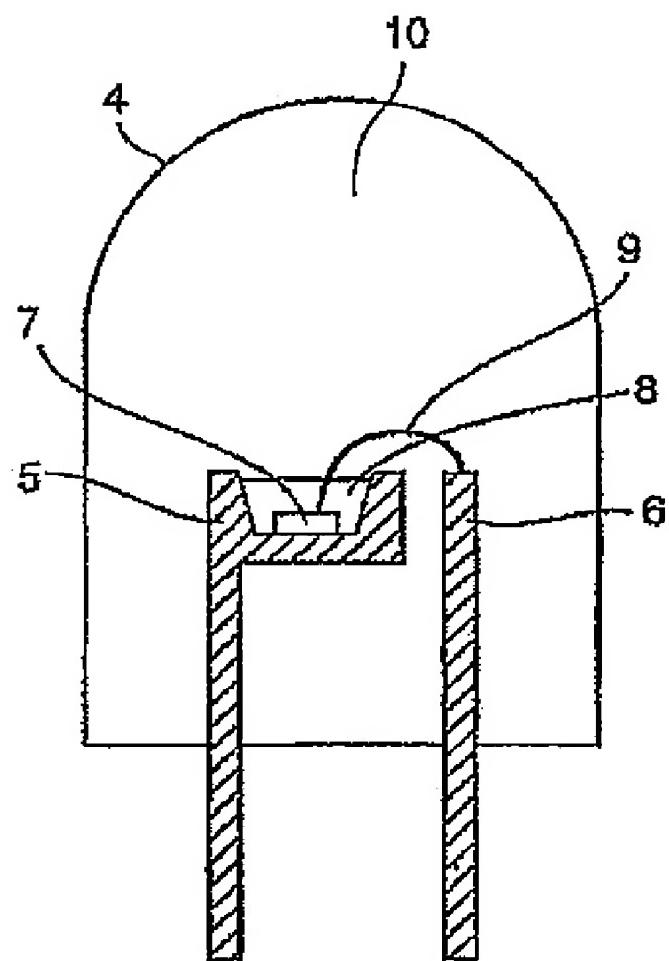
- 1 ; 第2の発光体
- 2 ; 面発光型GaN系LD
- 3 ; 基板
- 4 ; 発光装置
- 5 ; マウントリード
- 6 ; インナーリード
- 7 ; 第1の発光体(350~430nmの発光体)
- 8 ; 本発明中の蛍光体を含有させた樹脂部
- 9 ; 導電性ワイヤー
- 10 ; モールド部材
- 11 ; 発光素子を組み込んだ面発光照明装置
- 12 ; 保持ケース
- 13 ; 発光装置
- 14 ; 拡散板

【書類名】図面

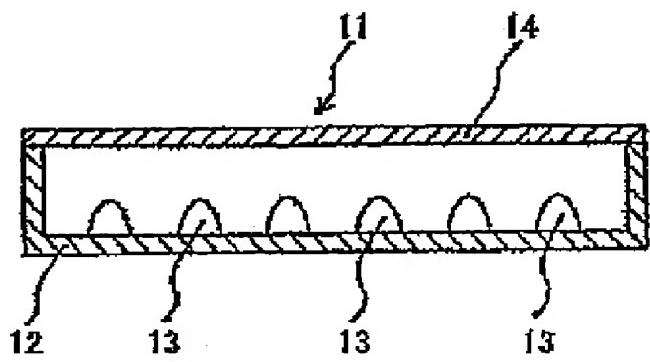
【図 1】



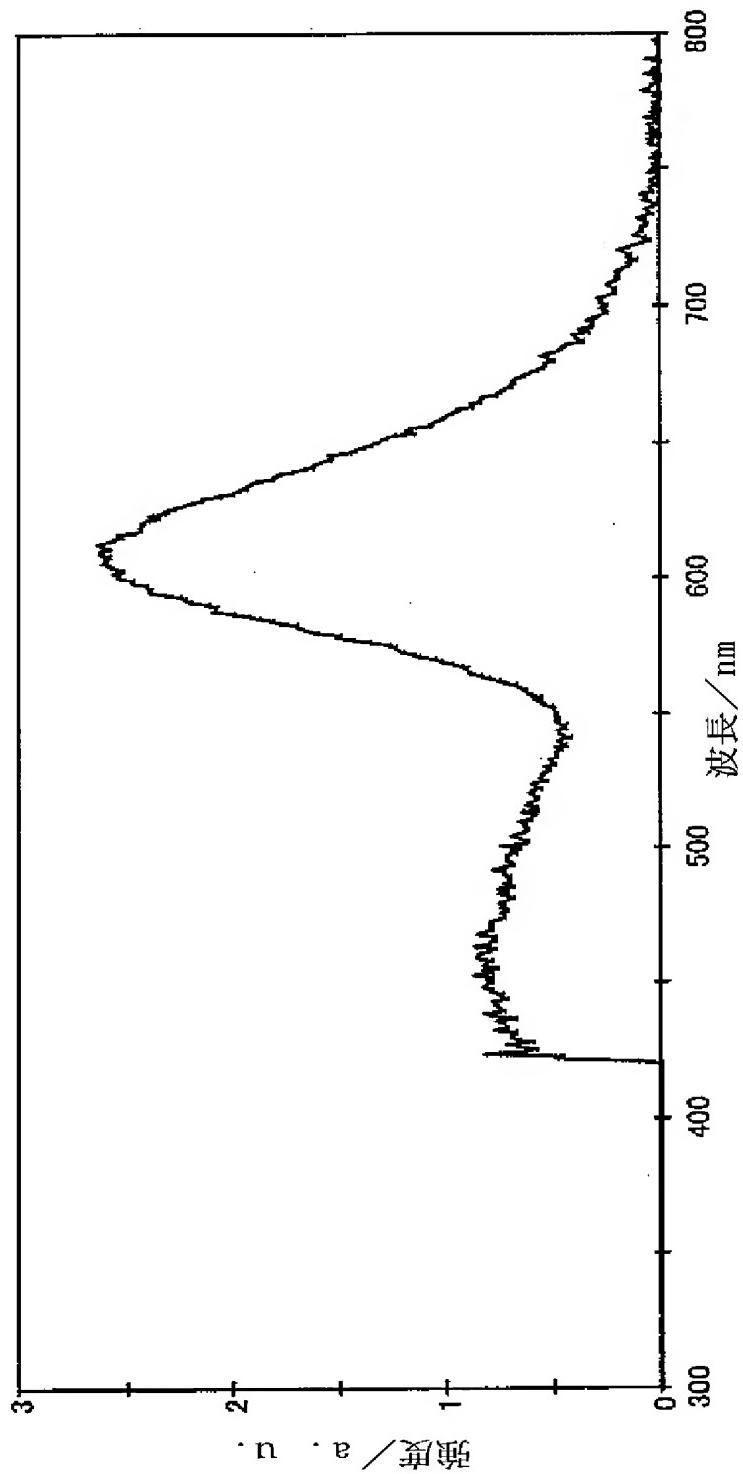
【図 2】



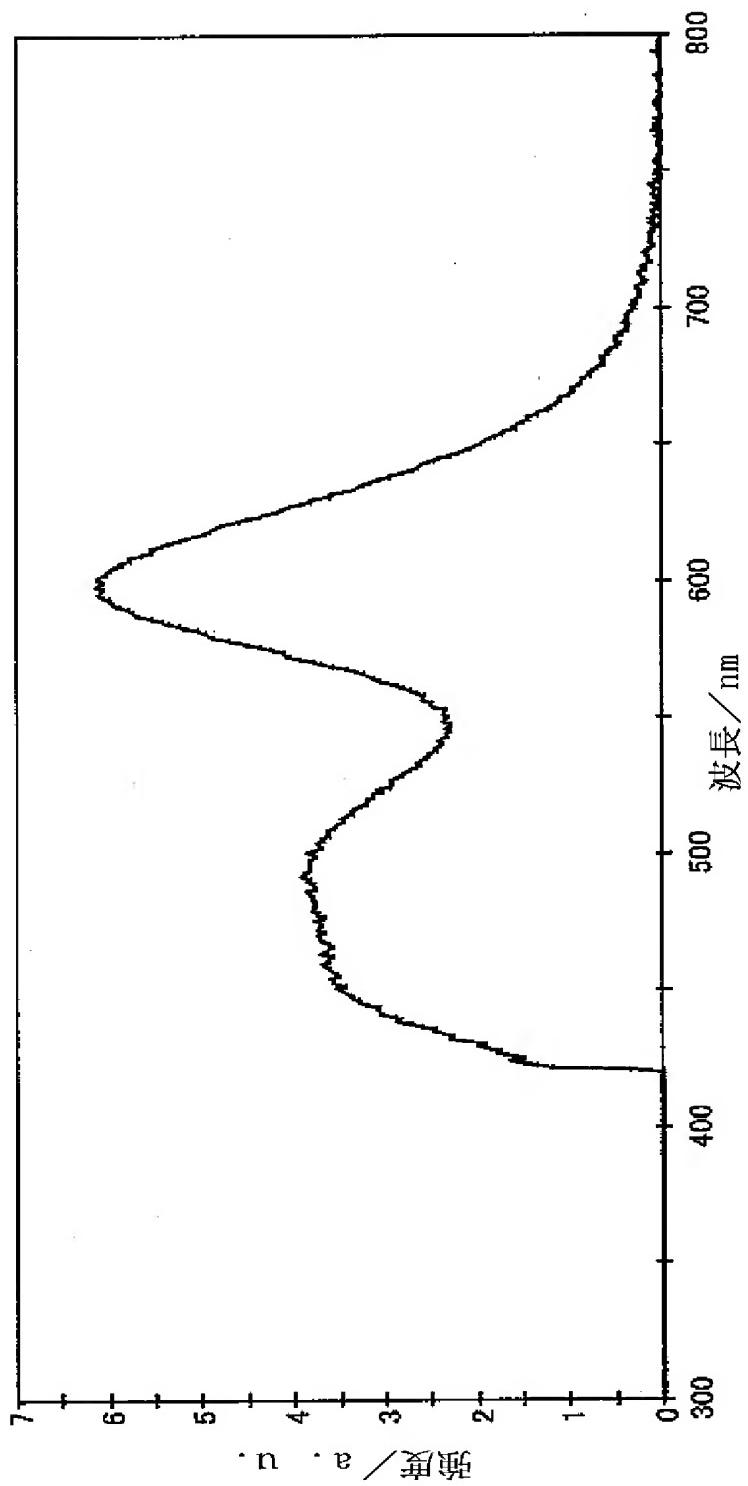
【図3】



【図 4】

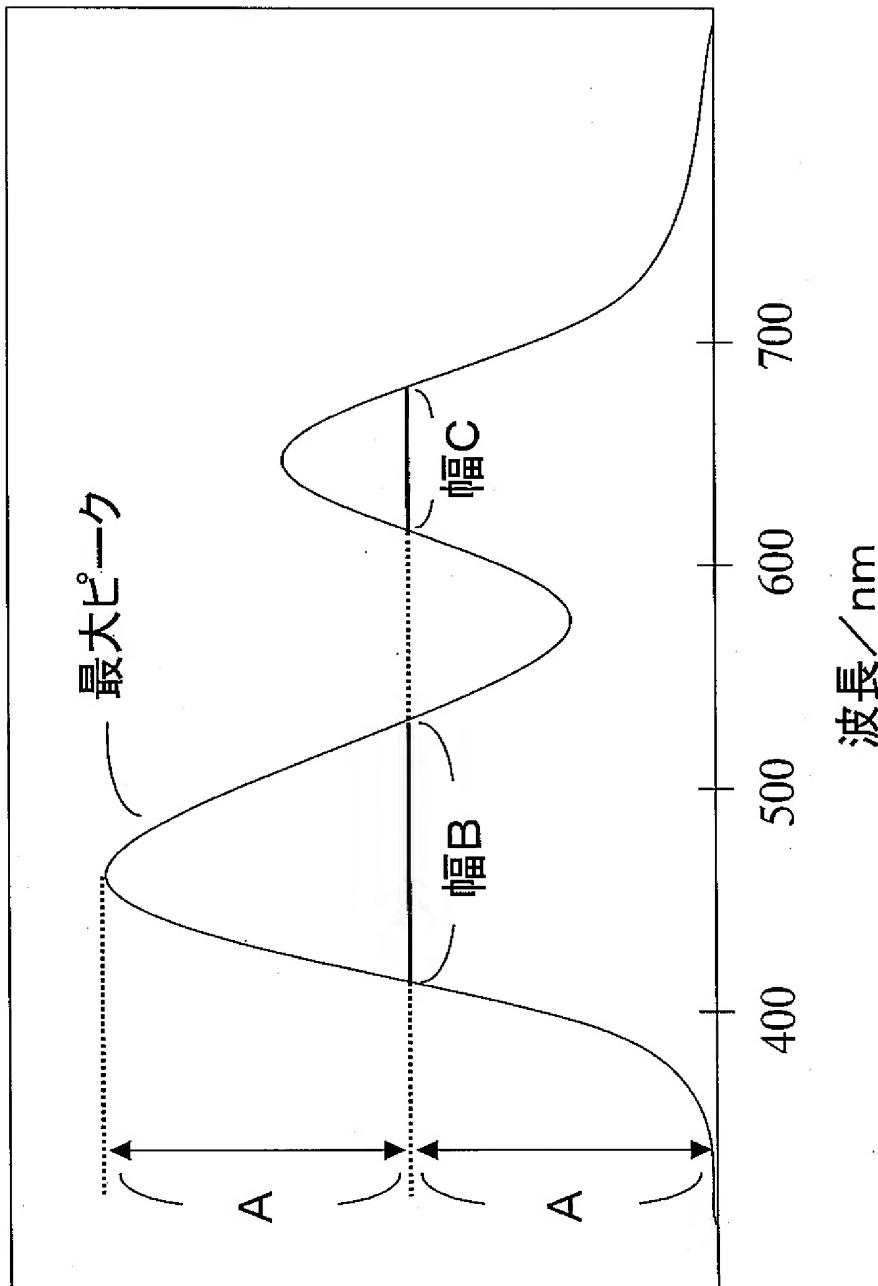


【図 5】



【図 6】

ビーカ群の半値幅 = 幅B + 幅C



極端

【書類名】要約書

【要約】

【課題】 演色性が高い赤色又は白色蛍光体、及び、350—430 nmの光を発生する励起起源と蛍光体を組み合わせ、演色性が高く、かつ、発光強度の高い発光装置を提供する。

【解決手段】 特定の化学組成を有する結晶相を有する蛍光体、及び、該蛍光体と、それに350—430 nmの光を照射するための発光源を組み合わせた発光装置とする。

【選択図】 なし

出願人履歴

0 0 0 0 5 9 6 8

20031010

住所変更

東京都港区芝五丁目33番8号

三菱化学株式会社